

マッシュピー・ワンパノアグの自治と土地
—19世紀を中心に—

Self-Government and Land of the Mashpee Wampanoag in the 19th Century

藤崎 葉子

FUJISAKI, Yoko

摘要

Wampanoag Indians in New England first met and helped the Pilgrims who arrived at Cape Cod in 1620. Gradually the teachings of Christ were propagated among the Mashpee and the Gay Head tribes of the Wampanoag. The Mashpee and the Gay Head plantations became “praying towns” for native Christians. During the King Philip’s War (1675-76) they took the colonies’ side or a neutral stand, which is why their population didn’t decline and they were able to maintain their land. By the mid-19th century, the district of Mashpee was the largest native community in Massachusetts. This paper focuses on the self-government and land of the Mashpee in relation to the state during the 19th century. Since 1789, Massachusetts appointed both white and native overseers to the Mashpee Wampanoag to rule them. However, the Mashpees led by William Apes, a Pequot Methodist preacher, stopped white settlers from illegally cutting and bringing trees from the Mashpee forest in 1833. They petitioned the Massachusetts legislature for the right of self-government and it was acknowledged in 1834. In addition, the Mashpees continued to petition the legislature to dismiss Phineas Fish, a Congregational pastor. In 1840 the legislature made the district of Mashpee a “parish” and allowed them to control the Meeting House, the land around the parsonage and their pastor. Thus the Mashpees gained both political and religious autonomy. In this process there were whites who helped them though some Mashpees were opposed to self-government. However, since the Mashpees were very poor, they needed the relief from Massachusetts. Furthermore, there were growing divisions between natives and blacks, the rich and the poor, and the traditional and the non-traditional Mashpees. Due to the influence of the Civil Rights Act in 1866, the Massachusetts Indian Enfranchisement and Allotment Act was passed in 1869. The Massachusetts State legislature divided the land of Mashpee including the common land, allotted 60-acres of land to each and allowed the Mashpees to sell their land to non-Mashpees. After the law was passed, they had to sell their land to pay tax. The Mashpees only lost their land and autonomy by the law. However, even after the district of Mashpee was incorporated as a town in 1870, they continued to self-govern formally. Because the Mashpee town was far from Boston

and its access was limited, most members of the town council and officials remained Mashpees until well into the 20th century.

キーワード：マシュピー、ワンパノアグ・インディアン、19世紀、自治、土地

Keywords: Mashpee, Wampanoag Indian, Nineteenth Century, Self-government, Land

はじめに

ニューイングランドのアルゴンキン語族の先住民ワンパノアグは、1620年にピルグリム・ファーザーズを迎え、彼らを助けたと伝えられてきた。ワンパノアグの一支族であるマシュピー(Mashpee)の間では、マーサズ・ヴィニヤード(Martha's Vineyard)島のゲイヘッド(Gay Head)とともに17世紀からキリスト教布教が行われ、1650・60年代には多くがクリスチャンに改宗し、彼らのコミュニティは先住民の祈りの町(praying town)と呼ばれるようになった⁽¹⁾。他のワンパノアグが起こした対植民地戦争フィリップ王戦争(King Philip's War: 1675-76)では植民地に味方するか中立を保ったため、戦後もマシュピーは人口が減らず、土地を維持した。19世紀前半、彼らのプランテーションはマサチューセッツ州で最大の先住民のコミュニティとなっていた。ゲイヘッドとは異なって、マシュピーのコミュニティは本土に位置したため、白人の影響をより受けてきたと言える。19世紀には彼らの土地や自治をめぐる歴史的に重要な事件が起こり、マシュピーの状況が大いに変わった。

マシュピー史の先行研究では、ニューイングランドの歴史家ドナルド・M・ニールセン(1985)が、1833・34年の「マシュピーの反乱」はマサチューセッツ州に土地権、自治を請願(petition)することによって、自治を達成したと論じた。また、別の歴史家ダニエル・R・マンデル(2003)は、1746年から1840年にかけてのマシュピーによる請願の歴史を論じ、「マシュピーの反乱」が約1世紀にわたるマシュピーの自治の探求を経たものであると指摘した。さらに、歴史学者のニコル・アレクシス・ブレオー(2014)は、マサチューセッツ州議会への請願によってマシュピーが1834-42年に自治、牧師の任命権、ミーティングハウスの使用やその土地権を得たことを明らかにした。そして、ブレオー、サーゴン・ドナベッド(2014)は、マシュピーが1840年に会衆派牧師のフィネアス・フィッシュ(Phineas Fish)を追放し、司教区の地位を与えられた経緯を論じた。一方、歴史学者のアン・マリー・プレインと人類学者のグレゴリー・バットン(1993)は、1869年にマサチューセッツ州のインディアン投票権・土地割当法(Indian Enfranchisement and Allotment Act)が制定される過程には、マシュピーと白人、黒人との摩擦だけでなく、先住民間の貧富、男女間の対立が見られたと主張した⁽²⁾。

以上の先行研究では、マシュピーが19世紀に土地や自治を守ろうとしたことは述べられている。しかし、マシュピーは1834年に政治的自治、1840年に宗教的自治を得た後に、1869年の

投票権・土地割当法によってマサチューセッツ州の市民となり、1870年には従来のインディアン地区から町として州に合併された。このように州から自治を得たマシュピーがその後、なぜ自治区の地位と土地を失うことになったのか、この過程と原因については十分に研究されていない。そのため本稿では、これらを当時のマシュピーの状況と時代背景とともに考察したい。史料としては、先住民・白人双方が州議会へ提出した請願書や当時の公文書、報告書を中心に分析する。人類学者のジャック・キャンピシ(1991)も請願書を用いてマシュピーが能動的であったことを明らかにしているが、1869年にマシュピーが自治区を失った原因については詳細に考察していない⁽³⁾。

1. 政治・宗教的自治—アメリカ独立後から 19 世紀前半

本節では、主に 19 世紀前半にかけてマシュピーが政治・宗教的自治を求めた背景と過程を考察する。

マシュピーはすでに 18 世紀後半から自治をめぐってマサチューセッツ議会に繰り返し請願を行っていた。従来、マシュピーはプランテーションで自治を行い、伝統文化とアイデンティティを維持していた。しかし、1746年にプリマス植民地がマシュピーの独立を防ぐために 3 人の白人の後見人(guardian)を指名した。これによってマシュピーは自治を行えなくなり、白人の後見人が土地を白人に割譲したため、部族は繰り返し抗議した⁽⁴⁾。しかし、訴えが聞き入れられず、マシュピーは自分たちの学校で教えていたルーベン・コゲンヒュー(Reuben Cogenhew)を 1760年にロンドンに派遣し、英国王ジョージⅢ世に白人の彼らの土地への侵入を止めさせるよう訴えた。コゲンヒューは南海インディアン(South Sea Indians)のモヒーガン(Mohegan)であった。英国王がプリマス植民地に政策を見直すよう命じた結果、1763年にマシュピー・プランテーションは自治を行う「インディアン地区(Indian district)」へと変更され、3 人のマシュピーと 2 人の白人が監督官(overseer)に任命された。また、同年に国王宣言(Royal Proclamation of 1763)で母国の承認なく入植者が先住民の土地を買うことを禁じた⁽⁵⁾。

しかし、その後もマシュピーは監督官や牧師をめぐって、マサチューセッツ州に異議申し立ての請願を行った。会衆派の白人牧師ギデオン・ホーリー(Gideon Hawley)⁽⁶⁾は 1756年にボストンの福音普及協会(Society for Propagation of the Gospel)から派遣されて以来、1807年に亡くなるまでマシュピーの信仰と政治に関わった。当初、ホーリーはインディアンへの布教に関心がなかったが、高給を得られるため滞在し続けたのであった。ホーリーは 1763年に 2 人の白人監督官のうちの 1 人に任命されたが、これには先住民の間では賛否両論があった。ホーリーを支持して、1779年に先住民のジョゼフ・リチャーズ(Joseph Richards)、ノア・ウェブクィッシュ(Noah Webquish)たちはマサチューセッツ議会に次のように請願している。「(忠実で親愛なるギデオン・ホーリー牧師はインディアンを文明化して福音をもたらし、色々と奉仕

してくれた。(中略)議会がギデオン・ホーリー牧師に対して全ての特権と牧師館とその周りの土地と牧草地の証書を与えることを望む」と請願した⁽⁷⁾。

ホーリーは上述の監督官制度の改革をマサチューセッツ議会に求め、マシュピー地区の統治を強化しようとしたが、論争を招いた。1788年に白人のナサニエル・フィッシュ(Nathaniel Fish)等の住民は、白人監督官によってアルコール漬けにされたマシュピーの多くが支配され、困窮していることを州議会に訴えた。一方、ホーリーは、自分が所属する福音普及協会を後見人にするよう求めた⁽⁸⁾。しかし、マシュピーの先住民ジェイムス・ルイス(James Lewis)たちは州議会に「ホーリー牧師とルーベン・フィッシュが自分たちの監督官の役割を果たすことを拒否する。(中略)バーンステイブルの善良な性格のサミュエル・サヴェイジ(Samuel Savage)医師ともう一人をホーリー牧師とフィッシュの後の監督官に任命してほしい」と請願した⁽⁹⁾。これに対し、同年にマシュピーの先住民エイブラハム・ミンゴ(Abraham Mingo)たちは「我々の敵は上記の監督官[バーンステイブル(Barnstable)のホーリー、ジョン・パーシヴァル(John Percival)、ルーベン・フィッシュ(Reuben Fish)牧師(筆者追記)]を解雇させるのに多くの金目当ての者を雇って州議会に請願させているので、彼らの請願は却下してほしい」と求めた⁽¹⁰⁾。翌1789年、5人の監督官から成る委員会に権限を託すマサチューセッツ州法が制定された。監督官たちは会議で1人以上の後見人を指名し、後見人が行政を担当して法的顧問を務めることになった。監督官の委員会は先住民の土地を貸したり、川、池、漁場、取引、契約、賃金を管理し、貧者の面倒を見ることになった⁽¹¹⁾。ホーリーは監督官の1人に任命された。マシュピーはこの監督官の委員会に支配されるようになり、自治は後退したのである。

また、独立戦争で多くのマシュピーの男性が亡くなったので、女性が州議会への請願のような政治権力を行使しようとして、ホーリーと衝突した。マシュピー女性はホーリーがアルコールの販売を禁じ、性交渉を規制しようとするのに抗議し、1792年には主要な女家長のセアラ・マイ(Sarah Mye)がマサチューセッツ州議会にホーリー牧師を告発した。19世紀初めまでに白人の商品やアルコールの流入によって負債を抱えた先住民は鯨取りになり⁽¹²⁾、また、独立戦争でマシュピーの男性が植民地側に味方して戦って約半分が亡くなったため、非先住民と結婚するマシュピーの女性もいた。ワンパノアグの支族ポカノケット(Pokanoket)は植民地に対して蜂起し、フィリップ王戦争後、土地を追われて多くが奴隷として売られた。その居住地であったロードアイランド州ブリistol(Bristol)では奴隷貿易が盛んになり、ケープコッドには多くの黒人が流入した。この非先住民の配偶者や黒人たちは当初、マシュピー地区で土地権を持たなかった⁽¹³⁾。

1792年にはマシュピー男性のイライジャ・ポクネット(Elijah Pocknet)たちも州議会にホーリー牧師を訴えた。1794年にホーリーはマシュピーの窮状を州議会に訴えたが⁽¹⁴⁾、翌年にマシュピー地区の先住民で政治活動家のエベネザー・クエピッシュ(Ebenezer Queppish)たちは、5人の監督官制度を定めた1789年のマサチューセッツ州法を可決させたのはホーリーであると

州議会に訴えた⁽¹⁵⁾。1792年から95年の間、ワンパノアグの血を引くバプティスト(Baptist)教会の牧師トマス・ジェファーズ(Thomas Jeffers)を中心にして、マシュピーによるホーリー批判は高まった。監督官がマシュピーの土地に白人を定住させたり、木を切らせたという訴えに対し、1796年に州議会はマシュピー地区から居住権のない者を追放し、また、非マシュピーが保留地で木を切ることを禁じる法を制定した。1807年にマシュピーの先住民ギデオ・ナウトムプム(Gideon Nautumpum)たちは州議会に、ホーリーを辞めさせないでほしいと訴えたが⁽¹⁶⁾、ホーリーは同年に亡くなった。その保守的な権威主義と人種的態度から、ホーリーは長年にわたり、マシュピーの間で多くの批判を呼んだ。

その後もマシュピーは監督官に対する苦情を訴えた。1807年から27年にかけて州議会にマシュピー地区の政治改革を何度か求めた。とくに1815年から1835年には、マーサズ・ヴィニヤード島など他のワンパノアグの支族と同様、後見人・監督官の変更や後見人制度の廃止と自治を求めた。しかし、先住民が自治を行う能力に欠けるとみなした州議会は無視するか、監督官をわずかに規制する法を可決しただけだった。1811年には、地区の合併や土地売却を許可することに反対していた先住民のモーゼス・ポクネット(Moses Pocknet)が監督官には彼らがふさわしいとみなす白人を選ばせてほしいとマサチューセッツ州議会に求めた。モーゼス・ポクネットの息子ネイサン・ポクネット(Nathan Pocknet)も1786年から1837年の間、1789年の法を廃止して、ホーリー牧師を辞めさせようとした⁽¹⁷⁾。

1790年には、先住民の土地を譲渡する際に連邦政府の承認を必要とする最初のインディアン交易法(Indian Trade and Intercourse Act)が公布された。また、1822年にマシュピーは合衆国陸軍省(War Department)に先住民部族として登録された⁽¹⁸⁾。一方、1823年にジョンソン対マッキントッシュ(Johnson v. McIntosh)事件判決においてジョン・マーシャル(John Marshall)最高裁判長は、「発見」の原理によってヨーロッパ諸国や合衆国は先住民の土地に対する権利を有し、合衆国政府のみが先住民部族と土地取引を交渉する権利を持つと判決した。そして、1830年代から40年代に何千人もの先住民が南東部からミシシッピ川より西の「インディアン・テリトリー」に強制移住させられ、1850年代までに保留地に収容された⁽¹⁹⁾。

白人の後見人や監督官による汚職や腐敗政治が変わらない中、1833・34年には「マシュピーの反乱(Mashpee Revolt)」が起きた。反乱とされるが、マシュピーによる非暴力の異議申し立てだった。従来は監督官がマシュピーに物資を配り、貧者の面倒を見て木の伐採を管理していた⁽²⁰⁾。しかし、1833年にピークォートの牧師ウィリアム・エイプス(William Apes)とマシュピーが州議会に自治を訴え、白人牧師のフィネアス・フィッシュ(Phineas Fish)を追放してミーティングハウスを取り戻すことを求めた。エイプスは、メソヂスト(Methodist)の巡礼牧師で、先住民のマシュピーが白人に支配されているのを見て、彼らの反乱を率いたのである⁽²¹⁾。フィネアス・フィッシュは、1808年にホーリー牧師が亡くなった後、1811年にハーヴァード大学からマシュピーへ派遣された会衆派の白人牧師だったが、白人にのみ説教し、ミーティング

ハウスを先住民に使わせなかった⁽²²⁾。1833年7月1日、白人がマシュピー地区の森に違法に侵入し、木を切って荷車に載せて運ぼうとするのをマシュピーが阻止し、木を荷車から降ろした⁽²³⁾。マサチューセッツ州知事のレヴィ・リンカン(Levi Lincoln)は議員のジョサイア・フィスク(Josiah Fiske)を先住民に遣わせた。フィスクは白人がマシュピーの森から木を持ち運ぼうとするのを止めさせた後で「騒動、急襲、侵入(riot, assault, and trespass)」を理由にエイプスと他の先住民を逮捕させた。しかし、白人の元会計でマサチューセッツ州サンドウィッチ(Sandwich)町の弁護士のリムユエル・エウアー(Lemuel Ewer)が200ドルの保釈金を払ってエイプスを釈放させた⁽²⁴⁾。

マシュピーは1833年5月21日の部族議会の会合で、エイプスの助言により「インディアン独立宣言(Indian Declaration of Independence)」を起草した。その内容は以下のとおりである。まず、州議会にマシュピーの自治、監督官の解任を求めた。次に、ハーヴァード大学長のジョサイア・クインシー(Josiah Quincy)とウィリアムズ(Williams)基金の理事に、フィネアス・フィッシュを解雇してマシュピーが牧師を選ぶ権利を求めた。また、フィッシュに牧師館の森から木を切るのを止め、すぐにミーティングハウスの鍵を返すよう命じた。最後に、エイプスをマシュピーに迎えることが定められた。この決議書はマシュピーとウィリアム・エイプスの100人の署名とともに採択され、議長のマシュピーのダニエル・B・エイモス(Daniel B. Amos)がハーヴァード大学に送り、マシュピー地区に掲示した⁽²⁵⁾。

1830年代までに多くのマシュピーは、バプティストの牧師「盲目のジョー・エイモス(Blind Joe Amos)」に従い、バプティスト派の信徒になった。エイモスは盲目だったが聖書を暗記し、マシュピー出身で初の先住民牧師となった。そして当時、ケープコッドでバプティスト派の布教活動が広まると、先住民の間で最初のバプティスト集会を開いた。マシュピーは保守的で彼らの伝統に合わない会衆派よりバプティスト派を好んだ。1788-1834年にかけて、マシュピーの3分の2がマシュピー・バプティスト教会で礼拝を行った。白人のフィッシュ牧師によって先住民はミーティングハウスに入ることが許可されていなかったため、エイモスは毎週日曜に樫の木の下で彼らに説教をした⁽²⁶⁾。そして1834年にエイプスの「マシュピーの反乱」に加わり、エイモスは自治を守る運動を導いた。

1834年にマシュピーはフィッシュ牧師の解雇と政治・宗教的自治を求める請願書を州議会に提出した。それによれば、監督官はマシュピーの森林の木を伐採して白人に彼らの土地を使わせ、地区の収入を奪って貧者を援助しなかった。また、フィッシュ牧師は白人のみに説教してマシュピーを無視し、ミーティングハウスを彼らに使わせなかった⁽²⁷⁾。そして、請願書は先住民による自治の権利を請求した。

我々マシュピー部族は最初のセイチャムが亡くなってから我々に有益な政府を持たなかった。それを促す自治法を制定するために憲法の自由を与えてほしい。(中略)行政長官

を1人か2人任命する法を可決してほしい⁽²⁸⁾。

一方、1834年1月1日にマシュピーのネイサン・ポクネット(Nathan Pocknet)や他のマシュピーは、ピークオートの牧師のエイモスがマシュピー地区に来て騒動を起こしているとして監督官復活を求めた⁽²⁹⁾。

このようにマシュピー反乱にすべてのマシュピーが共鳴したわけではなかったが、地元バーンステイブル(Barnstable)の住人でボストンの白人弁護士であるベンジャミン・フランクリン・ハレット(Benjamin Franklin Hallet)は「マシュピーの反乱」でマシュピーを支援した。1834年1月から2月に開かれた州の合同公聴会で、ハレットはマシュピーがマサチューセッツ州の市民であり、監督官法は自由、所有権の憲法上の権利に反していると主張した。また、公聴会で、マシュピー地区の元会計でマサチューセッツ州サンドウィッチ(Sandwich)町の弁護士レミュエル・エワー(Lemuel Ewer)がマシュピーのために証言した⁽³⁰⁾。マシュピーに自治を与える「インディアン地区」の設立には、ボストンの白人でアポリショニストのウィリアム・L・ギャリソン(William Lloyd Garrison)も1834年3月にマシュピーの訴えに共鳴し、州議会に働きかけた。ギャリソンは同時期のチェロキーの強制移住に反対し、黒人奴隷制とともに先住民の問題にも関心を寄せていたのである⁽³¹⁾。

マシュピー反乱の結果、1834年にマサチューセッツ州議会はマシュピー地区を「インディアン地区」と定めて非先住民の監督官制度を廃止し、先住民による自治を認めた。マシュピーは部族議会議員を選ぶ権利を得て、これら議員が従来の監督官の役割を果たすことになった。マシュピー部族政府は、部族選出の3人の議員、会計、連邦政府と議会によって任命された白人の委員によって成り立っていた⁽³²⁾。

こうして政治的自治を得た後、マシュピーはさらに宗教的自治も求めた。白人の会衆派牧師フィネアス・フィッシュはハーヴァード大学の先住民布教のための信託資金から給料を支払われていたが、白人移住者のために教会を使っていた⁽³³⁾。そのため、1835年にマシュピーは州議会にフィッシュを訴え、1684年に建てられたミーティングハウスの管理権、その周りの土地所有権、牧師任命権を主張した。1836年にもマシュピー先住民のウィリアム・ミンゴ(William Mingo)たちがハーヴァード大学の理事にフィッシュの実態を訴えた⁽³⁴⁾。一方、牧師館の周りの土地を部族の共有地にすると、宗教のために使う土地がなくなるとして、同年にネイサン・ポクネットたちは、それに反対する請願書を州議会に提出している⁽³⁵⁾。

1839年にマシュピーのエベネザー・アタクイン(Ebenezer Attaquin)と他のマシュピーは、フィッシュ牧師に独占されているミーティングハウスを先住民が選んだ白人のバプティストのE. G. ペリー(E. G. Perry)牧師が説教に使えるようにするか、他のハウスを与えるよう州議会に求めた。そして1840年に、ついにマシュピーはフィッシュをミーティングハウスから強制的に追い出して鍵をかけた。その結果、同年に州議会はマシュピー地区を司教区と定めて宗教的

自治を与え、ミーティングハウス、牧師館の周りの土地、牧師の管理権を認めるに至った⁽³⁶⁾。その後、フィッシュは 1846 年に家を売り、マシュピーのもとを去った。こうして長年、白人牧師を受け入れてきたマシュピーは、ようやく自ら牧師を選び、宗教的自治を行うことができるようになった。白人が入植して 200 年後、初めてマシュピーは自治を行い、裁判、学校、道路、司教区、福祉、自然資源を管理できるようになったのである⁽³⁷⁾。これらの自治を確立する過程で、上述の盲目の牧師エイモスはマシュピーの初期の指導者とされている。

2. 市民権と土地割当—19 世紀後半

本節では、その後のマシュピーの土地と自治がどのように変化し、1869 年にマサチューセッツ州が先住民に市民権を付与し、土地割当を促す法律を制定するに至ったかを考察する。

19 世紀前半、マサチューセッツ州議会には先住民のダニエル・エイモス (Daniel Amos)、オークス・クームス (Oaks Coombs)⁽³⁸⁾、マティアス・エイモス (Matthias Amos)⁽³⁹⁾ 等によってマシュピー地区の貧者救済を求める請願が多くなった。周辺より小さな先住民の村では、白人による土地略奪が進み、狩猟・食料・薬草を採集する森林や魚を獲る川・海岸への立ち入りが禁止された。そして、困窮によって生活できなくなった先住民がゲイヘッド地区やマシュピー地区のような大きな先住民保留地に移住したからである。また当時、ニューイングランドの経済が悪化したため、仕事を探して保留地を出る先住民もいたが、保留地は失業した先住民だけでなく、貧しい黒人や白人が集まる場所となった⁽⁴⁰⁾。しかし、マシュピー地区は土壌が悪く、僻地で良い仕事が見つからなかったため、貧者を援助できず、住人に燃料も与えられなかった⁽⁴¹⁾。このような保留地の貧困に対して州は経済的支援を行っていたが、人口増加を背景に、1842 年にマサチューセッツ州議会は、個人に 60 エーカーの土地を分配する「マシュピー地区に関する法 (Act concerning the District of Mashpee)」を可決した⁽⁴²⁾。ただし、マシュピー部族員以外の者への土地売却は禁止され、残った約 5000 エーカーの土地は部族の共有地とされた。一方、1790 年のインディアン交易法は、先住民の土地を譲渡するには連邦政府の承認を必要としていた。

1842-1870 年までマシュピーは毎年部族議会議員を選び、部族議会を開いた。議会はマシュピー地区の規則を定めて治安を守り、教育を行い、貧しい人を助けた⁽⁴³⁾。1849 年に全ての先住民部族の管轄が連邦インディアン局 (U. S. Bureau of Indian Affairs) に移ったが、マシュピー・ワンパノアグはリストに掲載されなかった⁽⁴⁴⁾。これは黒人との通婚が多く、先住民とみなされなかったためと思われる。1861 年の時点で、マサチューセッツ州内の先住民人口は 1,610 人であり、マーサズ・ヴィニヤード島のゲイヘッドとケープコッドのマシュピーのコミュニティはマサチューセッツ州内で最も人口が多かった。プランテーション部族と呼ばれた州の承認と援助を受けていた 10 部族の人口 1,241 人のうち、ゲイヘッドとマシュピーは捕鯨港近くのコ

コミュニティと併せて 928 人であり、大部分がボストンの南の捕鯨港近くに住んでいた⁽⁴⁵⁾。

1852 年にマシュピー女性の夫たちがマサチューセッツ州議会に土地の所有権を請願している⁽⁴⁶⁾。これは独立戦争で植民地側に味方して戦った結果、マシュピー男性の人口が約半減したり、マシュピーの男性が白人から得た商品やアルコールの負債を払うために捕鯨に行ったため、マシュピーの女性が非先住民と結婚したが、彼女たちの夫は土地の所有権がなかったからである⁽⁴⁷⁾。

1861 年、マサチューセッツ州議会の要請によって、同州インディアン局長のジョン・ミルトン・アール(John Milton Earle)が州内の先住民に関する最初の統計調査報告書を発表した⁽⁴⁸⁾。このアール報告書は、先住民を主流社会に同化させるために市民権付与と州の援助を推奨した。報告書には、マシュピーについて以下のように記述されている。1832 年にマシュピー地区の人口 315 人のうち 16 人が黒人、1848 年には同人口 305 人のうち 26 人が黒人、または白人と黒人の混血だった。そして、1859 年には人口 403 人のうち 32 人が先住民と結婚した黒人か、白人と黒人の混血、または黒人・先住民・白人の混血で純血の白人はいなかった。また、マシュピー地区は砂地で不毛で乾燥しており、まばらに木が生えているのみであった⁽⁴⁹⁾。

アール報告書によれば、1842 年の法律によって、土地所有者は税を査定することができたが、税を徴収する権限はなかった。税金を払っている住人は約半数であり、土地所有者以外の者が税のために土地を譲渡する権限はなかった⁽⁵⁰⁾。「貧者、学校、道路の支援、役人、会計の給料、突然の地区の支出は、1859 年 9 月 30 日で終わる年には 2,398.02 ドルになったが、(中略)ほとんど支出は州によって返済された」とある⁽⁵¹⁾。また、宗教活動に関する費用はハーヴァード大学の「ウィリアムズ基金」から出されたが、ミーティングハウスの 1855 年の修理費は州によって出された。さらに、1850 年代後半の火事でマシュピー地区の約 5,000 エーカーの森林が全焼し、マシュピーは経済的打撃を受けた。このように、州の経済的支援によってマシュピーは土地を失い貧困に陥るのを免れてきたが、特権と義務がある州の市民権を得ることが先住民にとって望ましい、とアール報告書は主張したのである⁽⁵²⁾。

南北戦争にも多くのマシュピーが従軍した。南北戦争後、1866 年の市民権法(Civil Rights Act)は黒人の男性に市民権を与えることを定めた。その可決後、マサチューセッツ州議会は州内の黒人だけでなく先住民にも投票権を与えなければ憲法違反ではないかと考えた。また、ほとんどの白人はワンパノアグが通婚によってもはや純血ではないとみなしたが、マシュピーをはじめとして、州内の先住民はアイデンティティを維持していた⁽⁵³⁾。

南北戦争前に南部からマシュピー地区に避難した逃亡奴隷がいたが、先住民の共同体で暮らす一方で土地や投票権を望む黒人もいた。こうして、非先住民の土地所有をめぐる、先住民と彼らと結婚した非先住民との間で軋轢が生じ、再建(Reconstruction)時代にこれが高まった。1868 年 12 月には、マシュピーのあるグループが土地売却の制限を廃止し、単純不動産権の土地所有を可能とする法律を求めた。約 24 世帯の 31 人のマシュピーが州議会に土地売却を妨げ

る相続人限定の廃止を求めたが、約 54 世帯の 56 人は抗議文とともにこれに反対した。1869 年 2 月に州のインディアン局 (Indian Affairs) 合同特別委員会 (Joint Special Commission) が開催したマシュピー地区での公聴会に出席したマシュピーや黒人の住民のうち、土地売却制限の廃止に賛成した者は 40 人のうち 14 人で反対者は 26 人であり、州の市民権付与に関しては 18 人が賛成し、18 人が反対した⁽⁵⁴⁾。しかし、この投票は州議会に影響を与えず、州議会は 4 か月後にはインディアン投票権・土地割当法を可決し、土地の限嗣相続を廃止した。

共有地を個人に分割し、売却できるようにすることを求めたのは、主に黒人と結婚したマシュピー女性や未亡人で、共同体の富裕者の中にもいた。投票権と土地割当を支持して公聴会で証言した 5 人のうち、3 人は黒人で再建期の改革運動の影響を受けていた。マシュピー女性と結婚した黒人のサミュエル・ゴッドフリー (Samuel Godfrey) は「私は市民と認められる町に住みたい」と述べた。また、元奴隷のヤング・グーチ (Young Gouch) もマシュピー地区で平等な権利を求めた。市民権は男性にだけ与えられるが、夫がいない間に自立していたマシュピーの女性は州議会に女性の投票権を求めた。マシュピーの配偶者の非マシュピーは土地権を持たないが、マシュピーの非先住民への土地譲渡が認められれば土地を買うことができた。マシュピーの成功した実業家で「非伝統派」のソロモン・アタクイン (Solomon Attaquin) は共同体への依存を止めることでマシュピー個人が向上すると主張した⁽⁵⁵⁾。

一方、市民権と土地割当に反対して公聴会で証言したのは、3 人のマシュピーと 1 人の黒人だった。ウィリアム・サイモンズ (William Simons) とジョー・エイモス牧師は、白人の議員にアピールするように先住民が市民になるには十分な教育を受けておらず、すぐに土地を失ってしまうと説明し、州がマシュピー自治区を合併したり土地を非先住民に売ることに反対した。一方、ネイサン・S・ポクネット (Nathan S. Pocknet) は以下のように先住民に固有の権利として土地割当に反対した。

我々が限嗣相続をやめるべき理由は見当たらない。限嗣相続はインディアンに約束された法律である。彼らは、インディアンから締め出され、そうせざるを得ないと言う。しかし、この土地や場所は我々のもので、元来、インディアンのものでされたはずだ。英国のチャールズ王が我々に土地を与え、インディアンのためにとっておいたと私は信じる。よって当初から土地は我々のものだ。我々は、地区を現在のように維持するために、その問題に取り組み、学校や他のもの、橋、道路などを造ろうと努力してきたのだ⁽⁵⁶⁾。

反対した先住民は伝統派であり、白人が先住民との法的な契約義務を怠らず、共有地を共同で耕し、貧者や高齢者、アルコール中毒者の面倒を見ることを望んだ。また、反対した黒人のジョン・ブラウン (John Brown) は先住民が税金を払えず、皆貧者になってしまうと述べた⁽⁵⁷⁾。

このように、先住民の市民権と土地割当をめぐる、マシュピー地区では賛否両論があった

が、1869年6月23日にマサチューセッツ・インディアン投票権・土地割当法が可決された⁽⁵⁸⁾。この法律によって、マシュピーは州の市民になり、部族員以外の者に土地を譲渡することが許可された。また、1870年5月28日に可決された法律で、マシュピー地区における3,000～5,000エーカーの共有地の譲渡が許可され、インディアン自治区としてのマシュピー地区は廃止されて町(town)となった。マシュピーとゲイヘッドは、マサチューセッツ州内で町として統合された最後のインディアン地区であった。しかし、この州が定めた先住民部族の土地譲渡は、連邦が1790年に定めたインディアン交易法に反し、矛盾していた⁽⁵⁹⁾。

マシュピー自身の懸念にもかかわらず、投票権・土地割当法が可決された原因は以下だと考えられる。土地を白人に奪われた先住民や19世紀前半のニューイングランドの不景気によって失業した先住民、黒人、白人が保留地に集まった。しかし、マシュピーは材木しか収入がなく、森林の火事で困窮しており、合衆国政府とは歴史的に条約を結んでいなかったため連邦の補助を受けられず、州の支援に頼るほかなかった。しかし、マサチューセッツ州は黒人とともに先住民に投票権と市民権を付与することによって同化を促し、経済的依存をなくそうとした。また、マシュピー地区では市民権と土地割当をめぐる、土地取得を求める黒人やその先住民の妻と他のマシュピー、経済的機会を求める富裕な非伝統派と貧しい伝統派、投票権を与えられない女性と男性の対立等によって部族内が分裂した。

1869年の法律により、マサチューセッツ州の部族員が土地を譲渡する場合は、2人の委員が土地を審査して境界を定め、遺言検認裁判所の承認を得ることが定められたが、マシュピー地区とゲイヘッド地区にはこれが適用されなかった⁽⁶⁰⁾。双方の地区は州内で最大の先住民コミュニティであり、黒人も比較的多く、彼らが土地取得を望んだからだと思われる。1871年に州は2,536.25エーカーのマシュピーの土地を187に分割し、合計7,056.76ドルで売却し、収入は町に入った。しかし、反対者が懸念したように、先住民は税金や負債を払うためにすぐに土地を売らざるを得なくなった。マシュピーの個人が所有していた土地は、次第に非先住民のものになり、部族の共有地も失われた⁽⁶¹⁾。

南北戦争後、合衆国政府は、土地の私有化、寄宿学校等を通じて、先住民をアメリカ社会に同化しようとした。議会は1887年に一般土地割当法(General Allotment Act)を可決し、保留地が分割されて部族員に分配された。分割されなかった共有地も次第に非先住民に売られ、先住民の土地はすぐに減少した。また、詐欺によって多くの先住民が土地を失った⁽⁶²⁾。こうした中、マシュピーは経済的困窮と内部分裂のために早くに土地を分割されたと言える。1860年から1880年までにニューイングランドの諸州は、歴史的に連邦政府が定めた「インディアン」としての特別な法的地位を終結し、先住民とその土地を州に統合していった。

1882年にはマサチューセッツ州が「マシュピー残余地処理法」を可決した結果、ほとんどの土地を白人が不在地主として購入し、50年以内にマシュピー町の多くを所有するようになった⁽⁶³⁾。しかし、部族の解体は免れた。1890年に内務省インディアン局長(U. S. Commissioner of Indian

Affairs)はマシュピーをまだ土地を所有している東部の数少ない部族の一つとして認めた⁽⁶⁴⁾。1849年には部族として認められなかった一方、1890年に認められたのは、土地割当を進めるためであったと考えられる。1870年代初めから1960年代までマシュピーの部族員は町の未開発地で漁業、狩猟を続けた。また、ゲイヘッド町とマシュピー町は、ボストンから距離的に離れており、当初は白人が居住せず不在地主が多かった。そのため、インディアン地区の議員は町の議員となり、部族員が町の書記、税徴収者、会計、巡査の地位も占め⁽⁶⁵⁾、土地権はなくなったが形式的な自治は維持したのである。また、マシュピーの歴史的跡地の区画はその後部族が守って所有し続けた。

終わりに

以上のように、19世紀にマシュピーの自治と土地は時期ごとに変化をとげた。本稿の考察で、19世紀前半にマシュピーは自治を得たが、貧困と内部分裂が続き、1869年に州によって市民権を付与され、土地割当が促されたことが明らかになった。

第1節で確認したように、独立戦争後、白人の牧師や監督官による支配に対してマシュピーは繰り返しサチューセッツ州に改革を請願していた。そして、1833・34年についてピークオートの牧師のウィリアム・エイプスやマシュピーのバプティスト牧師ジョー・エイモスらの先導によって「マシュピーの反乱」が起きた。白人に木を伐採して持ち運ぶことを許す監督官や、先住民に差別的な白人牧師を辞めさせるよう州議会に請願したのである。ピークオートの牧師エイプスが支援した反乱に批判的なマシュピーもいたが、マシュピーの自治確立のために州に働きかけた白人たちもいた。結果的にマシュピーは州議会への請願によって政治・宗教的自治を得るに至った。

第2節では、1840年代以降のマシュピー地区の変化を検討した。マシュピーは政治・宗教的自治を得た後も経済的困窮が続いた。コミュニティには黒人や他の先住民が流入し、貧者を救うために州の援助が必要だった。南北戦争後、黒人に市民権を与えた市民権法制定の影響によってマサチューセッツ州議会は先住民への市民権付与を検討した。州の市民権を得て土地を分割するかをめぐって、マシュピー地区では黒人と先住民、伝統派と非伝統派、貧者と富者などの対立が見られた。1869年にマサチューセッツ州でインディアン投票権・土地割当法が制定されると、マシュピーは州の市民権を得ると同時に土地割当と売却が可能となった。市民になれば州の支援をさらに得られると期待したマシュピーもいたが、実際は税を払うために土地を売らざるを得なくなった。アール報告書やインディアン投票権・土地割当法はマシュピーを市民にすることによって土地の分割と喪失を招くことになったのである。

このように、マシュピーは1830年代に自治を得たが、困窮と州への経済的依存が続いた。そして、州は1869年のインディアン投票権・土地割当法によって州内の先住民の土地を分割し、経

済的自立を促そうとした。以上の過程は、「明白なる運命 (Manifest Destiny)」のもとに先住民部族の強制移住が行われた 19 世紀前半にマッシュピーが一時的に自治を得ながらも、南北戦争後に同化政策が強まる中、次第に土地と自治を失っていった過程を示している。また、この歴史的事実が、20 世紀後半にマッシュピーが土地権を求める訴えの根拠となった。

注

- (1) マッシュピー以外のワンパノアグは、ゲイヘッド (Gay Head)、チャップクイディック (Chappaquiddick)、ナンタケット (Nantucket)、ナウセット (Nauset)、パタクセット (Patuxet)、ポカノケット (Pokanoket)、ポカセット (Pocasset)、ヘリング・ポンド (Herring Pond)、アサウオムセット・ネマスケット (Assawompsett Nemasket) である。
- (2) Donald M. Nielsen, “The Mashpee Indian Revolt of 1833,” *New England Quarterly*, Vol.58, No.3 (Sep 1, 1985), pp.400-420; Daniel R. Mandell, “‘We, as a tribe, will rule ourselves’: Mashpee’s Struggle for Autonomy, 1746-1840,” in Colin G. Calloway & Neal Salisbury eds., *Reinterpreting New England Indians and the Colonial Experience, Publications of The Colonial Society of Massachusetts* VOLUME LXXI (Boston: Colonial Society of Massachusetts, 2003) [<https://www.colonialsociety.org/node/1407>](最終閲覧日 : 2023 年 7 月 24 日); Nicole Alexis Breault, “‘Tenacious of Their Lands’: Fortifying The District of Mashpee, 1834-1842,” MA Thesis, University of Massachusetts Boston, 2014 [[Tenacious_of_their_lands_Fortifying_the%20\(1\).pdf](https://www.umass.edu/theses/theses/Tenacious_of_their_lands_Fortifying_the%20(1).pdf)](最終閲覧日 : 2022 年 5 月 7 日); Nicole Breault, Sargon Donabed, “‘Their Supervision was Temporal not Ecclesiastical’: The Formation of Mashpee Parish, 1833-1840,” in Sargon George Donabed and Autumn Quezada-Grant eds., *Decentering Discussions on Religion and State: Emerging Narratives, Challenging Perspective* (Lanham: Rowman and Littlefield, 2015)[https://www.academia.edu/10761102/Their_Supervision_was_Temporal_not_Ecclesiastical_The_Formation_of_Mashpee_Parish_1833_1840_in_Decentering_Discussions_on_Religion_and_State_Emerging_Narratives_Challenging_Perspectives](最終閲覧日 : 2023 年 6 月 15 日); Ann Marie Plane, Gregory Button, “The Massachusetts Indian Enfranchisement Act: Ethnic Contest in Historical Context, 1849-1869,” *Ethnohistory*, Autumn, 1993, Vol. 40, No.4 [<https://www.jstor.org/stable/482589>](最終閲覧日 : 2023 年 6 月 12 日).
- (3) Jack Campisi, *The Mashpee Indians: Tribe on Trial* (Syracuse, New York: Syracuse University Press, 1991).
- (4) “A Brief timeline of Wampanoag History,” [<https://mashpeewampanoagtribe-nsn.gov/timeline>](最終閲覧日 : 2019 年 11 月 13 日).
- (5) “Petition of Reuben Cognehew to His Majesty, King George III of England,” May 10, 1760 [<https://www.nativenortheastportal.com/node/16908>](最終閲覧日 : 2022 年 12 月 2 日); “Native Americans in New England Summer 2013 Five Colleges Inc. and the National Endowment for the Humanities Final Project Cover Sheet Due 27 July 2013,” [<https://www.fivecolleges.edu>](最終閲覧日 : 2021 年 10 月 16 日).
- (6) ニューイングランド会社の会衆派牧師。マッシュピーの政治的・宗教的問題に深くかかわった。“Hawley, Gideon, 1727-1807,” [<https://www.nativenortheastportal.com/bio/bibliography/Hawley-gideon-1727-1807>](最終閲覧日 : 2023 年 3 月 15 日).
- (7) “Petition of Joseph Richards, Noah Webquish, and Others of Mashpee to the Massachusetts General Court,” April 27, 1779 [<https://www.nativenortheastportal.com/node/16598>](最終閲覧日 : 2022 年 12 月 23 日).
- (8) “Petition on Behalf of Mashpee Proprietors to the Massachusetts Governor and Council,” June 12, 1788 [<https://www.nativenortheastportal.com/annotated-transcription/digcoll1788061200>](最終閲覧日 : 2022 年 11 月 25 日); “Petition of Gideon Hawley to the legislature of the Commonwealth of Massachusetts,” May 22, 1788 [<https://www.nativenortheastportal.com/annotated-transcription/digcoll1788052200>](最終閲覧日 : 2022 年 11 月 25 日).

- (9) “Petition of the Mashpee Indians to the Massachusetts General Court,” December 29, 1788 [https://www.nativenortheastportal.com/annotated-transcription/digcoll1788122900](最終閲覧日：2022年11月25日)。
- (10) “Remonstrance of Mashpee Proprietors and Others to the Senate and House of Representatives of the Commonwealth of Massachusetts,” October, 1788 [https://www.nativenortheastportal.com/annotated-transcription/digcoll1788103100](最終閲覧日：2022年11月25日)。
- (11) Mandell, “‘We, as a tribe, will rule ourselves’: Mashpee’s Struggle for Autonomy, 1746-1840”; Breault, “‘Tenacious of Their Lands’: Fortifying the District of Mashpee, 1834-1842,” p.25.
- (12) United States Department of the Interior, Office of Federal Acknowledgement, “Summary under the Criteria for the Proposed Finding on the Mashpee Wampanoag Indian Tribal Council, Inc.,” p.97 [https://www.bia.gov/sites/default/files/dup/assets/asia/ofa/petition/015_mashpe_MA/015_pf.pdf] (最終閲覧日：2021年10月7日); “Petition of Sarah Mye and Other Mashpee Indians to the Legislature of the Commonwealth of Massachusetts,” May 28, 1792 [https://www.nativenortheastportal.com/annotated-transcription/digcoll1792052800](最終閲覧日：2022年11月25日); Mark A. Nicholas, “Mashpee Wampanoag of Cape Cod, the Whale fishery, and Seafaring’s Impact on Community Development,” *American Indian Quarterly*, Vol.26, No.2 (Spring 2002), p.169 [Mashpee%20Wampanoags%20of%20Cape%20Cod%20(2).pdf](最終閲覧日：2021年6月7日)。
- (13) United States Department of the Interior, Office of Federal Acknowledgement, “Summary under the Criteria for the Proposed Finding on the Mashpee Wampanoag Indian Tribal Council, Inc.,” p.14.
- (14) “Petition of Elija Pocknet and Other Mashpee Indians to the Legislature of the Commonwealth of Massachusetts,” January 14, 1792[https://www.nativenortheastportal.com/annotated-transcription/digcoll1792011400](最終閲覧日：2022年11月25日); “Response of Reverend Gideon Hawley to Petitions Sent to the Legislature of the Commonwealth of Massachusetts,” December 15, 1794 [https://www.nativenortheastportal.com/annotated-transcription/digcoll179412155](最終閲覧日：2022年12月23日)。
- (15) Mandell, “‘We, as a tribe, will rule ourselves’: Mashpee’s Struggle for Autonomy, 1746-1840”; “Petition and Remonstrance of Ebenezer Queppish and Other Mashpee Indians to the Legislature of the Commonwealth of Massachusetts,” May 20, 1795[https://www.nativenortheastportal.com/annotated-transcription/digcoll1795052000](最終閲覧日：2022年11月25日)。
- (16) “An Act Specially Providing for the Removal of Poor Persons from the District of Mashpee, who have no Legal settlement there,” in *Acts and Resolves of Massachusetts* (1796), chap. 23, p.52. Cited in Campisi, *The Mashpee Indians Tribe on Trial*, p.93; United States Department of the Interior, Office of Federal Acknowledgement, “Summary under the Criteria for the Proposed Finding on the Mashpee Wampanoag Indian Tribal Council, Inc.,” p.97; “Petition of Gideon Nautumpum and Other Mashpee Indians to the Senate and House of Representatives of the Commonwealth of Massachusetts,” 1807[https://www.nativenortheastportal.com/annotated-transcription/digcoll1807000000](最終閲覧日：2023年7月11日)。
- (17) United States Department of the Interior, Office of Federal Acknowledgement, “Summary under the Criteria for the Proposed Finding on the Mashpee Wampanoag Indian Tribal Council, Inc.,” p.98; “Petition of Moses Pocknet and Other Mashpee Indians to the Legislature of the Commonwealth of Massachusetts,” January 28, 1811[https://www.nativenortheastportal.com/annotated-transcription/digcoll1811012800](最終閲覧日：2022年11月25日); “Pocknet, Nathan, 1770-,” [https://www.nativenortheastportal.com/bio/bibliography/pocknet-nathan-1770](最終閲覧日：2023年7月10日)。
- (18) The Associate Press, “Timeline of events in the history of the Mashpee Wampanoag tribe,” [https://archive.boston.com/news/local/Massachusetts/articles/2007/03/04/timeline_of_events_in_the_mashpee_wampanoag_tribe](最終閲覧日：2023年6月20日)。
- (19) David E. Wilkins, Heidi Kiiwetinepinesiiik Stark, *American Indian Politics and the American Political System* (New York: Rowman & Littlefield, 2018), pp.152-53.
- (20) “A Brief History and Description of Mashpee, Massachusetts,” [https://www.teachushistory.org/indian-removal/resources/brief-history-description-mashpee-massachusetts](最終閲覧日：2023年7月10日)。

- (21) “Apes, William, 1798-1839,” [https://nativenortheastportal.com/bio/bibliography/apes-william-1798-1839] (最終閲覧日：2023年7月11日).
- (22) “Fish, Phineas, 1785-1854,” [https://nativenortheastportal.com/bio/bibliography/fish-phineas](最終閲覧日：2023年7月11日).
- (23) United States Department of the Interior, Office of Federal Acknowledgement, “Summary under the Criteria for the Proposed Finding on the Mashpee Wampanoag Indian Tribal Council, Inc.,” p.98.
- (24) Nielsen, “The Mashpee Indian Revolt of 1833,” pp.410, 413-14.
- (25) Breault, Donabed, “‘Their Supervision was Temporal not Ecclesiastical:’ The Formation of Mashpee Parish, 1833-1840 in Decentering Discussion on Religion and State: Emerging Narratives, Challenging Perspectives,” pp.8-9.
- (26) Nicholas, “Mashpee Wampanoags of Cape Cod, the Whalefishery, and Seafaring’s Impact on Community Development,” pp.167, 187-88; United States Department of the Interior, Office of Federal Acknowledgement, “Summary under the Criteria for the Proposed Finding on the Mashpee Wampanoag Indian Tribal Council, Inc.,” p.90; “Blind Joe Amos, first Mashpee Wampanoag Preacher,” [https://www.aaanativearts.com/blind-joe-amos-first-mashpee-wampanoag-preacher](最終閲覧日：2023年7月11日).
- (27) “Petition of the Mashpee Indians to the Senate and House of Representatives of the Commonwealth of Massachusetts,” January 1834 [https://www.nativenortheastportal.com/annotated-transcription/digcoll1834012900](最終閲覧日：2022年12月2日).
- (28) “Petition of the Mashpee Indians to the Senate and House of Representatives of the Commonwealth of Massachusetts,” January 1834.
- (29) “Petition of Nathan Pocknet and Other Mashpee Indians to the Senate and House of Representatives of the Commonwealth of Massachusetts,” January 1, 1834 [https://www.nativenortheastportal.com/annotated-transcription/digcoll1834010100](最終閲覧日：2022年12月2日).
- (30) Breault, “‘Tenacious of Their Lands’: Fortifying the District of Mashpee, 1834-1842,” pp.30-31, 34.
- (31) Mandell, “‘We, as a tribe, will rule ourselves’: Mashpee’s Struggle for Autonomy, 1746-1840.”
- (32) Nielsen, “The Mashpee Indian Revolt of 1833,” p.416; “A Brief History and Description of Mashpee, Massachusetts.”
- (33) Breault, Donabed, “‘Their Supervision was Temporal not Ecclesiastical,’” p.1; United States Department of the Interior, Office of Federal Acknowledgement, “Summary under the Criteria for the Proposed Finding on the Mashpee Wampanoag Indian Tribal Council, Inc.,” pp.38, 41.
- (34) “Petition of Sundry Indians of Mashpee to the Trustees of Harvard College,” May 10, 1836 [https://www.nativenortheastportal.com/node/16404](最終閲覧日：2022年12月2日).
- (35) “Petition of Sundry Indians of Mashpee to the Massachusetts General Court for the Preservation of the Parsonage,” January 4, 1836 [https://www.nativenortheastportal.com/node/16314](最終閲覧日：2022年12月23日).
- (36) “Petition of Ebenezer Attaquin and Other Mashpee Indians to the Senate and House of Representatives of the Commonwealth of Massachusetts,” March 1, 1839 [https://www.nativenortheastportal.com/annotated-transcription/digcoll1839030100](最終閲覧日：2022年11月25日); Nielsen, “The Mashpee Indian Revolt of 1833,” p.417; United States Department of the Interior, Office of Federal Acknowledgement, “Summary under the Criteria for the Proposed Finding on the Mashpee Wampanoag Indian Tribal Council, Inc.,” p.14.
- (37) Harvard Corporation Records, 1827-36, vol. 7, 21 July 1836, Harvard University Archives, pp.430-35. Cited in Nielsen, “The Mashpee Indian Revolt of 1833,” p.418; United States Department of the Interior, Office of Federal Acknowledgement, “Summary under the Criteria for the Proposed Finding on the Mashpee Wampanoag Indian Tribal Council, Inc.,” p.99.
- (38) メディソンマン(祈祷師)。 (Campisi, *The Mashpee Indians Tribe on Trial*, p.135).
- (39) マシュピーの政治活動家。 (“Amos, Matthias,” [https://nativenortheastportal.com/bio/bibliography/amos-matthias-1748](最終閲覧日：2023年6月11日)).
- (40) Christoph Strobel, *Native Americans of New England* (Santa Barbara, California; Denver, Colorado: Praeger, 2020), pp.126, 136-37.
- (41) John Milton Earle, *Report to the Governor and Council, Concerning the Indians of the*

- Commonwelth, under the Act of April 6, 1859* (Boston: William White, 1861), pp.48-49, 63
[<https://archive.org/details/reporttogovern00senagoog/page/n214/mode/2up>](最終閲覧日 : 2023年7月9日).
- (42) “An Act Concerning the District of Mashpee.” In Acts and Resolves of Massachusetts, Chapter 72: pp.522-27(1840). Cited in Campisi, *The Mashpee Indians Tribe on Trial*, p.108.
- (43) Campisi, *The Mashpee Indians Tribe on Trial*, p.108.
- (44) The Associate Press, “Timeline of events in the history of the Mashpee Wampanoag tribe.”
- (45) Plane, Button, “The Massachusetts Indian Enfranchisement Act: Ethnic Contest in Historical Context, 1849-1869,” p.589.
- (46) “Petition of George Thomas Sewall and Lisbon Johnson to the Senate and House of Representatives of the Commonwealth of Massachusetts,” January 1852
[<https://www.nativenortheastportal.com/annotated-transcription/digcoll1852010000>](最終閲覧日 : 2022年12月2日).
- (47) United States Department of the Interior, Office of Federal Acknowledgement, “Summary under the Criteria for the Proposed Finding on the Mashpee Wampanoag Indian Tribal Council, Inc.,” p.14.
- (48) Earle, *Report to the Governor and Council*.
- (49) Earle, *Report to the Governor and Council*, pp.47-49.
- (50) Earle, *Report to the Governor and Council*, p.53.
- (51) Earle, *Report to the Governor and Council*, p.54.
- (52) Earle, *Report to the Governor and Council*, pp.50, 56, 58, 62, 64.
- (53) Jessica Hill, “Mashpee preserves memory of residents who died serving country,” *Cape Cod Times*, Sep.3, 2020 [<https://www.capecodtimes.com/story/news/2020/09/03/mashpee-preserves-memory-of-residents-who-died-serving-country>](最終閲覧日 : 2023年6月30日); Plane, Button, “The Massachusetts Indian Enfranchisement Act: Ethnic Context in Historical Context, 1849-1869,” pp.589, 592-93.
- (54) Massachusetts Legislative Papers, 1869, House Document No. 502, Hearing Before the Committee on Indians, at Mashpee, February 9, 1869, p.34
[<https://archives.lib.state.ma.us/bitstream/handle/2452/728134/ocm39986872-1869-HB-0502.pdf?sequence=1&isAllowed=y>] (最終閲覧日 : 2023年7月30日).
- (55) Massachusetts Legislative Papers, 1869, House Document No. 502, pp.21-22, 25, 33.
- (56) Massachusetts Legislative Papers, 1869, House Document No. 502, p. 23.
- (57) Massachusetts Legislative Papers, 1869, House Document No. 502, pp.21-28.
- (58) “1869 Chap. 0463. An Act To Enfranchise The Indians Of The Commonwealth,”
[<https://archives.lib.state.ma.us/bitstream/handle/2452/728134/ocm39986872-1869-HB-0502.pdf?sequence=1&isAllowed=y>] (最終閲覧日 : 2023年7月30日).
- (59) “A Brief timeline of Wampanoag History.”
- (60) “Chap. 0463 An Act to enfranchise the Indians of the Commonwealth,”
[<https://archives.lib.state.ma.us/bitstream/handle/2452/101400/1869acts0463.txt?sequence=1&isAllowed=y>](最終閲覧日 : 2023年6月13日).
- (61) Campisi, *The Mashpee Indians Tribe on Trial*, p.116.
- (62) Wilkins, Stark, *American Indian Politics and the American Political System*, pp.155-56.
- (63) United States Department of the Interior, Office of Federal Acknowledgement, “Summary under the Criteria for the Proposed Finding on the Mashpee Wampanoag Indian Tribal Council, Inc.,” p.44.
- (64) “A Brief timeline of Wampanoag History.”
- (65) The Associate Press, “Timeline of events in the history of the Mashpee Wampanoag tribe”; Daniel R. Mandell, *Tribe, Race, History Native Americans in Southern New England 1780-1880* (The Johns Hopkins University Press: Baltimore, 2008), p.197; Campisi, *The Mashpee Indians Tribe on Trial*, p.116.